

(八) 詩が消えて行く

吐息から、リズムや色彩が消えて行く

猛々しい吐息から

明日のない水蒸気が青ざめて吐き出される

ぶつぶつと煮えたぎる音がして

積み木のような吐息のかけらが

吹き飛んだガラス窓のように

ヒステリックな呪文を唱える

意味を持った韻律が消えて

不快な破調の狂雑音が

ナイフのように突き刺さってくる

責めないでくれよと

弁解に余念がない僕

足場で痛めた関節を庇いながら

足元に目を落とす

いつの間にか

自分が百数十メートルも

中空に押し上げられ

足元の民家が犬小屋のように小さい

突如、転落事故の妄想にかられ

落下する自分の体を凝視しながら

暗闇の空間を切り裂いて落ちて行く

瞬間、悦楽の境地が僕の体を支えている

(書き始め不明、仕上がり二〇二〇年四月二十九日)